



超高齢社会での歯科診療

(左) 医療法人恵裕会 ほかお歯科クリニック 歯科衛生士 小松右子氏
(右) 医療法人恵裕会 みやび歯科クリニック 歯科衛生士 国本菊枝氏

総人口に占める65歳以上人口の割合は年々上昇しており、これが21%を超える社会を超高齢社会と呼ぶが、既に21.8%に達し(総務省統計局2008年4月21日発表)、今後も上昇し続ける見込みである。

山口県にある、ほかお歯科クリニック(宇部市)とみやび歯科クリニック(山口市)では訪問診療の専門チームを設けている。院内はすべてバリアフリーとしており、開業以来、患者数は増加しているという。現在、訪問診療を専門に行っている小松右子氏と国本菊枝氏にそのポイントを伺い、両クリニックでの外来高齢患者への対応についても尋ねた。

診療所では見えない現状 通院したくてもできない患者は多い

両クリニックでは開業以来、患者数が増加している。その背景として、地域の特性(高齢者が多い、交通機関が発達していない、など)が挙げられるが、加えて、訪問施設やケアマネージャー、病院から信頼され紹介患者が増えていることも挙げられる。現在、訪問診療の専門チームには歯科医師1人、アシスタント1人、そして歯科衛生士(DH)として小松氏と国本氏の2人が働いている。口腔ケアのみの場合は、DH1人で訪問する。

小松氏は、一度、OLとしても長く働いたことがあるが、同クリニックの往診車を目にして訪問診療に取り組みたいと思い、DHに復帰した。「訪問診療に携わって初めて、口腔トラブルを抱えた高齢患者さんが非常にたくさんいることに気づきました」と同氏は述べる。

また、国本氏は、結婚や出産による休業を繰り返しながらも、通算20年間DHとして働いてきた。そのなかで、通院が困難となった高齢患者を多く見て、「診療所では何もできない」もどかしさを感じていたという。訪問診療を行っている同クリニックを知り、通勤に1時間かけても訪問診療に携わりたいと、門をたたいた。

表1 高齢患者に配慮した工夫

ハードの整備: バリアフリー
・待合室、診療室、トイレなど、移動のしやすい広いスペース
・両面開きの扉、スロープや手すりの設置
・スリッパを使用しない(靴、車椅子でそのまま入れる)
ソフトの整備 -1: 医院としての工夫
・スタッフ全員が往診の経験を持ち、介護福祉士の指導による研修・実習を受講
・問診表は、A3版で、大きな文字で記入
・車椅子の方などは、ゆっくりしている時間に予約
・いくつもの疾患を抱える患者も多いため、病院と連携(アレルギーや投与薬の確認など)
ソフトの整備 -2: 患者接遇時の配慮
・足の不自由な方や高齢者については待合室の席まで迎えに行き、危険のないよう誘導
・診療前や診療後(バスやお迎えが来るまで)の待ち時間、あるいは診療中に毛布を貸して体の負担を軽減
・不安を感じる方には、付き添いの方にも診療ユニットの近くに座ってもらう
・プライドを傷つけるような過度の介助・指導や発言は避ける
・話しかける際は、明瞭な発声で落ち着いた声で、簡潔に、わかりやすい言葉を使う

外来、訪問、居宅 ——高齢患者の心身への配慮

通院する高齢患者のなかには、通院も大変だが、「待合室で待つことも辛い」という方も多い。同クリニックでは、高齢患者などに対する様々な配慮がされている(表1)。

また、一口に高齢患者といっても元気に通院する方から寝たきりの方まで幅広いが、共通して言えることは、プライドを傷つけるような指導や発言は注意すべきということである。加齢により生じる心身の機能低下は、高齢患者本人に大きな喪失感をもたらしていることがある。国本氏は以前、普段どおりにブラッシング指導をした後、患者から「もう来なくて良い」と言われたという。「後で看護師さんから聞いたのですが、心血管疾患によって右腕の麻痺をきたしたばかりの患者さんでした」と沈痛な面持ちで振り返る。

キーパーソンとの信頼関係を築き、 濃やかな情報交換を

訪問診療や居宅では、患者だけではなくその家族や看護師などのスタッフも関わってくる。こうしたスタッフと、濃やかに情報交換できる信頼関係を構築することが重要である。

小松氏は、「個々の患者さんによって、そして同じ患者さんでも日によって、好みや心身の調子が異なる。

周りの方からこれらの注意点を話していただいた場合、ケアの質もだいぶ向上します」と指摘する。こうした良好な関係づくりには、報告書を渡したり気づいた点をメモして伝えたりと、DHからの積極的な情報提供も欠かせない(表2)。

他職種との「チーム医療」

看護師やケアマネージャーであっても、口腔ケアについての知識や経験を持っているスタッフは少ないため、口腔ケアへの関心や理解を持ってもらえるよう働きかけることもDHの大切な役割である。資料となる指導パンフを渡したり、介護者の負担を考慮した無理のない口腔介護を提案したりしているという。「他職種とともに『チーム医療』として臨まなければ、患者さんのQOLをあげることは難しいです」と国本氏は述べる。

もちろん苦労もある。いすへの移動や寝たきりの方の上体を起こす介助、また、認知症患者からの力強い抵抗にあうこともある。しかし、「体力的にきついこともありますが、口腔環境の改善によって、摂食が可能となったり表情が明るくなったり、心身ともに回復される患者さんの姿を見ると、これまでにない充足感ややりがいを感じます」と、2人とも口をそろえる。口腔トラブルが看過されがちなこうした患者こそ口腔ケアを必要としている——興味のあるDHには是非、取り組んで欲しいとその重要性を語った。



訪問先でのケア——「きれいにさせていただいて、気持ちが良くなるわねえ。嬉しいわあ。ありがとう!」

表2 記録のポイント

報告書*
<input type="checkbox"/> 実施日
<input type="checkbox"/> 医療機関住所・電話番号
<input type="checkbox"/> 施術者名
<input type="checkbox"/> 指導内容
・口腔内の清掃方法
・義歯の清掃方法
・リハビリ
・その他
<input type="checkbox"/> 介護者へのメッセージ
<input type="checkbox"/> 特記事項
個人メモ
<input type="checkbox"/> 治療・ケアに使用した製品
<input type="checkbox"/> その効果
<input type="checkbox"/> 患者の日常生活上の変化

*日本訪問歯科協会作成の報告書より抜粋

取材協力: 日本訪問歯科協会(東京)、グループホーム・宅老所 喜楽苑(山口)

日本訪問歯科協会 連絡先
歯科往診を始めたい、往診の現場で働きたい方は、以下へご連絡ください。
TEL: 0120-299-505
(平日9:00~20:00)
E-mail: info@houmonshika.org

次号、休載いたします(編集部)

一步、踏み出して
——やりたいことを
1つずつ実現

医療法人恵裕会 理事長・歯科医師
外尾雅男



私たちは歯科医療の専門家であり、患者がきちんと食べられるような口腔環境を整えることが仕事の第一義である。その方法には、歯周病治療や補綴、メンテナンスなどそれぞれの形があるが、大切なことは、自分が何をやりたいか、どのような形で患者に関わりたか、である。「訪問診療に興味があるが、不安」という声をときどき聞くが、自分にとっての新しい取り組みに不安はつきものである。

私は、やりたいことをメモに残しており、膨大な数となったが1つずつ実現したいと心がけている。やりたいことがありながらも躊躇している方には、是非、そこから一步踏み出して欲しい。